ver.202102

サンビオティック農業で大豊作！

さつまいも　栽培基準

◆苗床（育苗）◆

ステージ	内容	商品名	10a施用量・倍率	施用方法	備　考
定植1～2か月前	土づくり	完熟堆肥 菌力アップ	1トン 10リットル	土壌混和 全面散布	苗床の土壌pHが高い圃場では、立枯れ病など出やすいため、pH5.0～6.0程度の圃場を選ぶ。 土壌消毒する場合は、堆肥は土壌消毒の前後いずれかでもよいが、菌力アップは必ず土壌消毒後（ガス抜き後）に施用し、土壌混和し、微生物相を作っておく。希釈倍率は、適宜でよいが、目安として50～100倍程度。
植付け前1か月～2週間	元肥	有機百倍 鈴成	10袋 10袋	土壌混和	地力に応じて、または品種や播種時期に応じて、有機百倍の量を調整します。
伏せこみ、植付け～	発芽促進 生長促進	菌力アップ	5リットル	100～200倍希釈で潅水　7日おき4回以上	菌力アップで、発根促進、健病育成を促進します。チッソが足りない場合は、必要に応じて、追肥します。ポット苗定植の場合は、活着促進のため定植後、菌力アップを数回手潅水します。

◆本圃◆

時期	ステージ	商品名	10a施用量・倍率	施用方法	備　考
3月	土づくり	完熟堆肥 菌力アップ	1トン 10リットル	土壌混和 全面散布	育苗と同様に、土壌pHは必ず5.0～6.0に調整する。 堆肥は、家畜糞堆肥の多投は避け、できれば植物性のものにする。植付けの1か月前までには施用する。牛糞堆肥なら1トンまでとし、鶏糞や豚糞は使用しない。コガネムシ発生圃場では、堆肥は省略する。また前作残渣のすき込みはしない。
		土壌消毒をする場合は、土壌消毒後（ガス抜き後）に菌力アップを10リットル（100倍希釈）を全面散布し、混和する。 消毒・施肥・畝立て・被覆を同時処理する場合は、消毒ガスが抜けた後、菌力アップ10リットル（50倍希釈）を畝に「潅注」する。さらに、通路にも菌力アップ100倍希釈を十分散布しておく。			
	元肥	有機百倍 鈴成 硫酸カルシウム 硫酸マグネシウム	2～4袋 5袋 40kg 20kg	土壌混和	定植2週間前までに土壌混和する。品種、作型等によって、有機百倍の施肥量は調整する。鈴成を施用すと、病気に強く、また肥大性が良い。加工用の場合、増収を目指すなら、株間や畝間を1～2割短くして、鈴成10袋まで増やし、有機百倍を通常より2袋追加してもよい。 硫酸カルシウム、硫酸マグネシウムは、市販のものを使用する。病害や芯腐れ症の出やすい圃場では、ほう砂200gを元肥としてムラがない様に万遍なく散布する。 マルチ被覆をしない場合は肥料分の流亡を考慮し、有機百倍1～2袋を追肥する。
4～5月	定植後	菌力アップ 糖力アップ	10リットル 5kg	株元潅注（または潅水） 10日おきに2回以上	植付け直後、土が乾いていたら必ず株元へたっぷり潅水し、活着を確実にして、初期の葉の枚数を確保する。 活着後、菌力アップ、糖力アップを混用・希釈して、株元潅注（または潅水）する。 基腐れ病やつる割れ病の心配がある場合は、糖力アップをやめて、本気Ca（マジカル）を3リットル、菌力アップとともに株元潅注（または潅水）する。数回実施すると、耐病性が高まる。
6～9月	品質向上 病害対策	本気Ca（マジカル） マジ鉄	2000倍希釈 5000倍希釈	30日おきに葉面散布	近年問題となっている基腐れ病をはじめ、立ち枯れ病、つる割れ病などへの対策とするため、ミネラル施用は非常に重要となっている。 本気Ca（マジカル）は、有機酸カルシウムにより耐病性を高め、肉質をち密にする。また、マジ鉄5000倍を加用すると、天候不良時の光合成能力の向上により、病害抵抗性を向上する。農薬との混用可。 病害発生が見られる場合は、本格にがり500倍を加用する。繊維を強化する働きがあり、また食味も向上する。なお、本格にがりは、芋質に繊維が強くなりやすいため、多用は控えること。（2～3回程度まで） なお、いずれも農薬との混用可。（銅剤との混用は不可）
7月～8月上旬	追肥	硫酸加里	10kg	追肥	通路に粒状の硫酸加里（市販）を追肥し、肥大促進する。コーソゴールド5kg（200倍希釈）を2～3回散布しても良い。地上部生育が旺盛すぎるとき、害虫が多い時は、つる返しをする。

※土壌診断を実施し、データに基づいて施肥設計を行うことをお勧めします。品種や土壌条件等によって、施肥量は加減してください。